

「色彩がない？」 「ここはどこ？」 「ひとの声？」 ヤマでの幻覚

OWCC 中川和道 20190116

何だか、とぼけた話だ。中川は登山中に何度か幻覚もどきの現象に出会ってきた。あわても
のだから、見間違い、聞き違い、思い違い、考え違い、早とちりは日常茶飯事。でも、これは、
ひょっとして、幻聴？幻視？と思ったことがある。

1983年ころ3月に谷川岳滝沢リッジを登っていた時だ。天気は悪く、登攀は次第に厳しさを
増していった。心がだんだん閉ざされてくる。あれ？視界から色彩が消えている。白と黒の、
色彩のない世界だ。これは何だ？あかん、と自分におまじないをかけた。いいか、目の前の岩
は茶色だ、コケは黄緑だ、と何度も何度も自分に言い聞かせる。目を閉じて自分を洗脳し、も
ういいかなと目を開ける。いいぞ、少しずつ色が見えてきた。コケが黄緑だ。相棒のヤッケ
の色は黄色だ・・・。さっきのアイゼンのツメをかけ直し、さっきのホールドを再び握る。登れ
るぞ。えいっ。一步は登ったものの心に負けがまだ残ってはいるが、気持ちよ、前に向け・・・。
無事登頂し下山した後もこの経験は強烈で、しばらくはあの感覚の再来を恐れた。その後だい
ぶん抜け出した。考えてみればこういうマインドコントロールを何度かやってきたことに気づ
いたのだ。テニス選手たちもやっているじゃないか、もっと気楽にいこう、と。

次ははっきりと幻聴の話だ。夏山で沢のほとりで幕営していたら、沢の水音の中からひとの
声が聞こえる。うとうとした眠りから次第にさめると、おいおい、ここが何という山だか分か
らない。穂高のはずだ、と思えども、前に同じ経験があった鈴鹿山脈での若き日を思い出して
混乱する。こう書くと「中川は危ない」と思われようが、実は、中川はこれを山に慣れていく
儀式だと開き直っている。「3日坊主」という現象は日記でも仕事でも山でも同じだ。初めの3
日間は気が張っているから何とかやり過ごすが、入山後3日目ともなると、初期の気の張りだ
けではやっていけず、山でリラックスしながら山とがっぷり組んで相対していくことが重要と
なる。この気持ちの切り替え儀式が、中川には「ひとの声？」 「ここはどこ？」なのだ。今後
も、こんな儀式で、山とうまく付き合っていきたいと思っている。

幻聴かと思ったもうひとつは、鈴鹿だったかと思うが、ひとりで雪洞に泊まっていた時だ。
夜中に不思議な音で目が覚めた。みし、みし、と何かが外を歩き回っているようだ。冗談じゃ
ない。クマはここにはいないはずだ、落ち着け落ち着けと自分に納得をと迫るが、では何だ？
と思うと、かえってこわい・・・。刻々と時間がすぎる。雪がしまっていく音だとやっと思極
めるまでしばらくかかった。西丸震哉さん[1]も書いておられたたことで、今では懐かしい、駆
け出し時代の思い出だ。

中川も年だ。でも山って、本当にいろいろありますね。みなさんの幻覚体験は？？？

[1] 西丸震哉『山の博物誌』実業之日本社(ブルー・ガイド) 1966。